ときには、辛口

10

◇十一連覇

松本道介
Matsumoto Michisuke

九月初めに相模原市のグリーンプールでおこなわれた水泳の学生選手権で中大が見事十一連覇をとげた。

水泳学生選手権史上初

昔から水泳は日大が断然強く、優勝の回数もとびぬけて多いが、その日大でも連勝は十で終っている。したがって中大の十一年連続優勝は輝かしい新記録なのである。

私はこの八年水泳部長をつとめていて、毎年秋の三日間の学生選手権は必ず見ているが、八年の連続優勝とて優勝までの経過はさまざまで、初日に優勝のきまってしまう年もあれば、三日目の最終レースでやっと優勝が確定する年もあった。伊藤兄弟のいた全盛期には楽勝という感じの優勝が多かったが、他の大学とてそういつまでも手をこまねているわけではない。近年は筑波大がかなり追い上げてきたし、今年は連覇の記録を破られる日大に激しい闘志が感じられた。とりわけ日大は二人のオリンピック出場選手をかかえている。

オリンピックといえば、四月の選考会の時期に中大の調子は全体に今ひとつだった。オリンピックに手の届きそうな選手を何人もかかえながら、際どいところで選考にもれ、ついに一人の出場選手も出せなかった。したがって夏の猛練習はオリンピックに出場出来なかった悔しさをバネにしていたし、大会に入ればライバルの日大は背泳銅メダルの森田とメドレーの三木を擁しているだけに、いやでもオリンピックを意識せざるを得なかった。

なるほどオリンピック出場選手にはさすがと言いたくなる強さがあり、今度の学生選手権も二日目の後半にいたるまで日大が強く、点数も少しリードしていた。そして二日目の最終レースである四百米メドレーリレーがやってくる。第一泳者が背泳の森田だから気分的には日大が優位にあった。

圧巻の四百メドレーリレー

しかし今伸びざかりの二年生、中大山口は素晴らしい泳ぎで森田とタッチの差のほぼ同着で山下に引き継ぐ。北島を除くと百米平泳では敵なしの中大山下が日大三木を引き離す。第三泳者のバタフライ菱沼は従来のタイムからすると日大の泳者に追いつかれる恐れなしとしなかったが、見違えるようなと言おうか、あるいは一世一代の泳ぎと言おうか、追いつかれるどころか日大を引き離してしまった。自由形の細川は踊りあがるような思いで

引き継いだにちがいない。たいへんな速さで百米を泳ぎ切って中大は大会新記録で第一位。中大の全盛期よりさらに良い記録で泳いでしまった。

私は以前にもまして水泳で一番面白いのは四百米メドレーリレーだと思うようになった。このリレーは出場選手の従来の記録の足し算にならないレースとなる場合が多く、メンバー一人一人の気力がものをいってしばしば番狂わせが起きるからだ。今年の学生選手権のメドレーリレーが番狂わせであったかどうかはともかく、五年ぶりに四百メドレーリレーで一位をかちえた中大はすっかり勢いづき、最終日は細川が百米自由形で四十秒台を確実に射程に入れた五十秒一三の日本新を出して優勝したのをはじめ、次々にポイントをかせいで日大を引き離し、結果はぶっちぎりに近い優勝になってしまった。

その夜の祝賀会では部員一人一人が天皇杯になみなみとついだビールを飲むのだが、その前に一人一人が短いスピーチをおこなう。恒例となっているこのスピーチはそれぞれに中味があるので、部長の私はいつもこれを聞くのを楽しみにしている。一人一人の選手がこれだけ見事に話の出来る運動部は日本中探してもないのではなかろうか。

これは水泳部の練習を人間教育の場と見る高橋監督の方針の成果だと思う。監督は練習前のミーティングにあたって選手の誰彼を指名して自分の泳ぎのことや泳ぎの目標のことを話させる。こうして選手は自分で話し、また他の選手の話を聞くことによって自他を知り、ものを考えるとともに仲間の連帯意識も強めていく。そんな様子を見ていると水泳部の練習というより高橋ゼミといった性格の人間教育の場だとも思われてくる。

むろん水泳競技自体は競争であり闘いなのだから旺盛な闘志も不可欠である。闘志をたかめる儀式としては、毎年学生選手権の二、三日前に行われる出陣セレモニーがある。全員が野外の五十米プールの手前に腰をおろして見まもるなかを選手が一人ずつプールサイドを歩いて五十米先のスタート台に立つ。そこで自分の名前を名乗ったうえで「俺がやらなくて誰がやる！」、「百米平泳では絶対に一分一秒を切るぞ！」といった具合にみずからの思いを叫ぶのである。もしもこれが五、六米の距離から叫んでいるのであれば、一種のスピーチになってしまうが、五十米という距離を置くとまさに肚の底から声を出さなければならない。胸の奥にある一番切実な思いを叫ぶしかない。すると一人一人の身体ごとの思いが五十米の水面をこえてひしひしとつたわってきて大変な感動を覚えるし、この選手たちなら今年も優勝まちがいなしという信頼感も強く湧いてくる。

五輪メダル超えるような

こうして中大水泳部は今年も見事な優勝をとげたので、部長たる私は今さらながら、良い部だとの思いを新たにした。優勝を喜びあう若者たちの顔は爽やかな喜びに輝いていた。それはオリンピックでメダルをとった若者の喜びとは少し異なる喜びであり、もしかすると五輪メダルをとった若者たちでさえ羨むような種類の喜びではないかと思われた。

それは三十人ほどの若者が団体優勝という共通の目標へ向けて連帯意識をもって努力を続けた末に、目標に達したときの喜びであり、個人が個人で目標に達したときの喜びよりもずっと大きいものではなかろうか。

（文学部教授）